

文樂評切拔帳

(七月一日―八月四日)
(東京新橋演舞場)

凡庸の出足

安藤鶴夫

近松圓熟期の傑作「國性爺合戦」三節目の前に今度は順序を逆に梅枝女の道行を出してゐるのも不届きだが、この美しい道行のシテ相生大夫が讀みつけ同然で恰で本を離れられず、なにをいつてゐるのか分らない上に、吉五郎を筆頭の三味線陣が混亂、人形もたゞなんとなくうろ／＼と動いてゐるといふ惡演で、東上文樂座初日の序曲は甚だ印象が悪い。

樓門の南部大夫は一通り、大隅大夫の獅子ヶ城はたつぷりとして分りよく、氣合の籠つた清二郎の絃と共に佳作、「紅流し」の呂大夫は震へ聲がやゝ訂正されたのはよいが、被つて語り過ぎるのと内政辯は惜しい。

人形も總じてこの前の所演よりは動きに

曖昧な件が少くなり、門造の甘輝など滋味がある。大東亞殿下にある「父は唐土、母は日本」といふ義理の揃み合ひもいろいろな感慨を起させるが、國性爺と改めてからの和藤内が、長髪長髪で唐冠をつけた古怪な團七の頭で、唐人の甘輝を溫和な檢非違使の頭にしてゐる人形の演出には、今更乍ら先人の卓抜した豊かな演出力を知らされる。今度の古靱大夫の「寺小屋」では特に「持つべきものは子なるぞや」の「ぞ」の生み字を非常に延ばして、古靱としては珍しく抒情味を持った事と、門火の件で「うッ」と「つ愁ひ一杯に呼吸を詰めてから」「あいと返事(その内に)」以下のいろは送りのかゝりが、さらさらとして、清六の絃との離れ工合に無類の面白さがあつた。

人形では榮三の松王が他を壓してよく、玉造の病氣不參で龜松の源藏は全然内容が空虚である。文樂の人形修行は幾多の傳説

があるにも拘らず、この程度の人形遣が古靱大夫の「寺小屋」で榮三の松王に對して源藏の役を持つ、これは人形の操作が易しいといふ證據だが、また精神の伴はぬ技術が如何に空虚なものであるかといふ見本でもある。

尙今度は私が一昨年七月所演の際に指摘した「詮議に及ばぬ連れうせう」の人形誤演が、榮三と玉市の玄蕃に依つて改められてゐる。

「宿屋」の掛合では絃大夫の駒澤が群を抜き、伊達大夫の朝顔は氣持ちの悪い程ベタ／＼と絃に着いて素人藪同然、七五三大夫の岩城は恰で駄々子だ、但し八十歳の老齡にも拘らず色も香もある觀西翁の絃は三味線を聴いてゐるだけでも充分樂しめる呂賀大夫改め松大夫の「大井川」は高音がいへてゐない件もあるが、逃げずに一杯に語つてゐるのはよい。――東京新聞――

演舞場の文樂

福原麟太郎

第一回は五日まで先づ「國性爺合戦」梅

檀女道行は童話風にまよつてゐて、よい小品になつてゐる。樓門から獅子ヶ城、紅流しと續いて、紋十郎の錦祥女、位もあり美しくいいのである。

その錦祥女の自害を發見した文五郎の老母が、つと吾が生みの子の和藤内をかへりみて、義理の娘の忠義の死をその一瞬間目顔で語る。この心理的周旋には畏れ入つた。次は「寺小屋」古鞍大夫。桐竹亀松の武部源藏、家へ歸つて來るところから、松王丸の出までの間、歌舞伎芝居の内攻的な演じ方と違ひ、別氣に富んだ表現的な動きを見せるのが面白く適切である。

榮三の松王、首桶を持つて來られた時、刀に倚りかゝるやうにして身體を斜に持ちこたへてゐる間、實に悲痛に感じた。

最後は「朝顔日記」紋十郎の深雪、可憐な出來。背景その位安びかで、幻想を破られる。もつと古風に出來ぬものか。

— 東京朝日新聞 —

文樂の『杖』

三宅周太郎

例年の如く人形淨土りの文樂座が演舞場

へ出る。第一回の一日より五日間の興行は初步的にはいゝ出し物だ。即ち第一に近松の名作「國姓爺合戦」の三段目が出て「樓門」は南部大夫で悪くない。次の「獅子ヶ城」は大隅の上出來の上、文五郎の和藤内の母は老巧だが、「紅流し」の呂大夫は言語明晰を欠く。人形は和藤内を若手の玉助が遣ふが、もつと大きく遣ふ心づかいが要る。なほ大夫たちは「五常軍甘輝」と語つてゐるのに、番附は近頃誤つてゐる「五將軍」となつてゐるのは困る。が、錦祥女と母との可弱い女が命をすてる犠牲的精神によつて、この作の終局が一變する所に、國策男和藤内以外の日本精神が光る。

第二は竹田出雲の名作「菅原の寺小屋」これで近松と出雲とが一夕で分るわけか。古鞍の得意藝だが前より奥がよく、松王の「泣き笑ひ」が最もうまい。この人の藝風が變つて來たからであらう。第三は若手連で「朝顔日記」。但し大入り満員は結構だが、人形と大夫ともつと活を入れない。後進を育てたい。これこそ將來の文樂の「杖」だからである。

— 東京毎日新聞 —

讀ふべき

觀西翁の健闘

竹内芳衛

○……古い傳統と歴史を持つ人形芝居、世界に誇つてよい日本藝能としての人形芝居が、みて楽しむ領域のものでなく、一つの保存藝術とし鑑賞の対象として僅かにその命脈を保つてゐるに過ぎないといふことは何といつても淋しい、榮三、文五郎の兩名人、百年の後果して何人が一座を率ゐて文樂座のために氣を吐くか、その將來性を考へる場合、人形芝居の生活能力といふものが何處まで繼續されるであらうといふ點を考へざるを得ない。さういふことを考へると甚だ心細い感じがしないでない。ここまで進化し洗練された藝能が近い將來において亡び去つてしまふのではないか。さういふ事を考へながら見物しなければならぬ觀衆としては、榮三、文五郎の至藝に魅せられる度に正比例して時代の推移に對する無常觀が愈々濃厚化するわけである。

○……しかし今度の「赤道神」のごとき

文樂の二の替り

堀川 寛 一

ものが新作されて、人形芝居といふものに新しい題材が繰込まれて行くといふことは必ずしも電氣應用までの事をしなくても亡び去る藝能でないことが内面的に約束されてゐないではない。ただ問題は作品である「赤道神」に遺憾ながら作としては大したものでない、だが演技において紋十郎の「赤道神」の熱演は大いに認めらるべきだ。

○……先代萩御殿場の伊達大夫、伊勢音頭の切の古靱大夫、清六の三味線、太十では南部大夫に相生大夫、私の耳には吉五郎の三味線に印象的な蒔さが残された。鶴澤觀西翁は八十の老翁であるといふことが、特に私の興味を引いた、藝の世界における八十翁の健闘は、文樂の若手に何を教へてゐるか、文樂の將來は特殊な観客に限定しない方向に繋がるべきであるが、若手の語り手も、三味線弾きも、人形使ひも、文樂の藝能を一つの古典藝術としてその命脈を保たしむるか、一步を進めて創意に生きるか、大いに考ふべき秋である。古典は最もモダンたり得る契機を持つものゝ謂であるからだ。——同盟通信——

演舞場の文樂は二の替りを見た、古靱の

「伊勢音頭」は流石に立派で人物が生きてをり、榮三と文五郎二者の醸し出す雰圍氣に堪らない味があつたが、芝居ほど盛り上らず引き締らなかつた。その代り芝居の見通してゐる何でもない所に何ともいへない情感が流れてゐた。「赤道神」は三味線樂の立派さに打たれた。暗轉の間の歴々の節奏など怖い位だつたが振りが如何にもひどい。艦長や砲術長に踊りの振りをつけるのも可笑しいが、赤道神を達者に任せて振り返し、花道を使つたり、赤い光線を投げさせたりする紋十郎の不心得には唖然とするばかりで、赤道神化して狐つきになつてしまつた。作の嚴しい精神を損んでかゝればあんな馬鹿らしいことは出来ない筈である

——讀賣報知——

文樂と新作

三宅 周太郎

文樂に對して古靱大夫、人形遣ひの榮三

文五郎の亡き後は、殆ど滅亡のほかないとさへ悲觀的に見てゐた私も、昨今は必ずしもさうでないやうな氣がした。あれだけ世間が迎へてくれれば、とかく鈍重といはれる文樂の後継者と雖も、或は他日奮起し、有能者たる日がないとはいへぬからである。

文樂の古典に對しては流石に定評はあるが、新作となると殆ど問題にならない。しかし能樂にすら新作は出、また新作は幼稚でも東亞共榮圈内なる廣い地域の、藝能の啓蒙運動の重要性を考へる時、文樂も雖も新作を閑却すべきではない。某知友が今度の文樂の新作「赤道神」を見て、以上の如き氣持でなら満更すたものでないといつてゐたが、兎に角新年もまた將來考慮すべき要はある。

だが、それには一によき作家の出現を祈る。今の文樂の新作は作者が匿名か何かでそれだけでさへ臆病である。堂々たる一流の作家が、脚本を書いたと同様に、文樂の新作を試みる機運を助長したいと思ふなりこれにはどこまでもこの藝術の本領たるらしい日本精神發露を第一條件にした上の話で

ある。 — 東京毎日新聞 —

文樂の千本

鬼 太 郎

「義經千本櫻」は院本中屈指の時代物であり、大物である。其の最初に於て義經主従の中心人物を明らかにし、平家方の知盛、維盛、教經三人を順々に全五段に絡ませて何處にも逃ぎ切れなき出来栄は、流石に名作者手揃ひの名篇。人形に歌舞伎に古今盛衰なき人氣は誠に道理であり、文樂一座が今度國民演劇参加作品として、大夫と時間の許す限り、一本槍にこれを提出したは想ひ着きである。

尤も、二ノ切「大物」の雄勁悲壯の最巧の場を出さぬは、蜚龍に點睛を缺く憾なれど趣向の要因、今の世には憚るべきなれば、省略是非なしとし、以下、床と人形の主なるものを拾ひて、手ツ取り早く御紹介に及ぶ。（初日當日交通の關係上開催時間に後れ、「椎の木」場の切より見物。）

紋十郎の小金吾は、少し老けてゐれど確な出来。蜚屋では、床の古軀がすっかり枯淡の味を出し、語る爲に語つて、聴かせる爲に語らぬアクぬけしたは進歩老成、紋下の名を辱めぬ。權太の「數瞬き」や、内侍の「一門残らず」が屈き切らぬのと、權太の「躍り出で」が混雜して、故人大隅が時代と世話を唯この一句の中に判然させたを思ひ出した位が、予に取つての不足の方で人も知つたる長丁場を用意周到に語り切つたは此の人の淨瑠璃の質から言つて大手柄である。

◇

清六の絃は穩かてゐて切れ離れよく、大夫と相應に弾きながらも從屬せぬ獨自性のあるは立派な腕、人形では榮三の權太勿論第一、外では龜松の維盛（左がもう一息）小兵吉の女房など好く、門造の景時も始終形ちの整つてゐるのが感心。紋十郎のお里は、行儀好いが色氣不足。道行は榮三の忠信の獨り舞臺。床は忠信、靜とも光る聲が耳障り、幾ら世事でも然う吊上がらずとも事だ。

切、河連館では、義大夫が陰氣ながら無

事な出来。人形では文五郎の靜を初め龜松の義經、多三郎の駿河、紋司の忠信など無難、玉助の狐忠信の引抜き早替りは御苦勞程度。 — 東京新聞 —

空虚な人氣

安 藤 鶴 夫

◇……日延べを入れて三十五日間といふ文樂座の長期出開帳の記録が、果して觀客の人形淨瑠璃に對する、正しい認識と愛情に依つて贏ち得られたかどうか問題である。東上七回の外題替りを通して殘る印象を一言にしていへば、「青年文樂」一座の上置きに古軀大夫、榮三、文五郎が特別出演をしてゐるといつた感じの弱體は被ふべくもなかつた。

◇……豊かな幾多の材料を持つ由緒ある老舗の名菓が商標だけを大袈裟に裝つて、その材料さへ果していゝものであつたのかと疑はれるやうな、粗惡な味に低下した品を、人が並んでゐるのでその行列に加はつてゐるといつたやうな名實の伴はぬ極めて空虚な實はれ方をしてゐる。大夫、三味線

人形といふ三位一體の藝だけに、中に心得た職人がゐて、時に皮や衣だけがうまく出来ても蒸しや捏ね方の技術が拙劣なため、渾然たる風味がないといふ結果に終る。

◇……しかもなによりいけない事は床と勾欄とがおなじ目的を持つて舞臺を構成してゆくといふ美しい協力の精神を失つた事で、榮三、文五郎の老體を勞つたり、玉造の病休などいふ理由から特配された大役であるにも拘らず、人形遣の中堅が人形の職分を超えて今度は特に大夫、三味線に逆つていくのを屢々目撃した。藝の上の争ひではない、素淨瑠璃でやつてゆけるかといつた風な、人形遣の不遜な態度がまざまざとみられたのである。

◇……東上第一の傑作古板大夫の「引窓」や榮三の由良之助などといふ優れたものを味ふ舌を持たず狐憑き宛らに紋十郎の赤道神が荒れ狂つた「赤道祭」(なんといふ能の「皇軍鑑」との相違よ)たゞ戦死といふ暗い面だけが強調された「水漬く屍」などといふ時局便乗の新製品を賞美する人々にも一半の責任はあるが、この人形遣の思ひ上りが、傳統藝術の最大の誇りたる美しい

秩序を破壊していくのは由々敷い大事である。

私は敢て「青年文楽」といつた、こゝでも亦なにより秩序と協力とが青年に望まれるのだ。——東京新聞——

各地展望

編輯生

竹本利根大夫連

七月廿五日内市眞砂町金光教會別館眞光館に開演、當夜生憎の豪雨にも拘らず柴治鹿の子など藝豪の顔も見え、四五十の聴天狗を引寄せ相當延ばしてゐた。その語り物藤堂 郁華「酒屋」 奥野幸風「十種香」 牧野小文正「鈴森」 飯塚和風「沼津」

若女會七十一回

八月一日東京淺草雷門東橋で開催。駒榮の御殿▲素次、清三の忠六▲素廣、巴住の太十▲素人、駒登久の千本鉾屋▲土佐廣綱助の壺坂。

大阪東京名人會

東都本所區蒲川一丁目文化俱樂部に於て

六月廿八、九の兩日正午開演、五時終演。

(前日)▼忠六 保谷紅司(稻丸)▼壬生村 野口生樂(稻丸)▼大晏寺 星野桔梗(綱助)▼菅四 吾孫子櫓(稻丸)(後日)▼岸姫 栗原千鶴(猿平)▼酒屋吾孫子櫓(稻丸)▼沼津 野口生樂(稻丸)▼太十 中澤巴(猿平)

四國素義會續き(二)

▲黒川自樂の鮮屋、「様子」を聞いたかよう、これも良い代物ぢやがの植付けが悪い、故に梶原に權威なく、平凡な武士となつて仕舞つた、云ふまでもなく此の場の梶原には一種の腹があつて、そこに云ふべからざる味ひあるものだが低調に終始した、その上に引字澤山は異様な香する感あるも修養次第で合邦に劣らぬ精製品が得られるが何分にも梶原の腹が語られてゐないのが缺點である。▲山田小紋の廿四孝は「悠々」として一寸落付に乏しく一回向しやうとて「魂かへす」語り物に合致せぬ音が出た、然し打て付けの語り物と思ふ、これで正式の修養を経れば日本無双の十種香になるだらう。▲八木義宗登の伊賀八、糸紡ぎ